

13

画家の留学 青山義雄氏にうかがう 一九二〇年代フランス滞在の一齣 稲賀繁美

一九二二／二年

一九二二年から翌年にかけては、欧州に日本人があいついで

滞在した頂点をなす時期だろう。日本ではすでに戦後の好景気は終わり、不況と倒産の季節を迎える傍ら、朝日新聞では島崎藤村の『エトランゼ』の連載が二年はじめまで続いていた。この洋行ブームは二三年以降、統計的にも明らかに失速する。その要因としては、二三年九月一日に勃発した関東大震災の影響が大きいだらう。清岡卓行の『マロエの花が言った』は二四年末にパリに発つた岡鹿之助から筆を起すが、本稿ではその三年前に焦点を絞り、人々の交流を点描したい。といつても、その全貌を描くことはもとより不可能。論旨を繋ぎとめるため、ちようどの時期にパリに住み付き、その最後の生き証人となった画家の視点をお借りすることしよう(以下、青山氏がフランス語で発音された語は原綴を優先し、訳語を添える)。

一九二二年二月二十五日、青山義雄(一八九四—一九九六)はクライスト丸で横浜を発ち、欧州へと向かった。マルセイユ経由でパリについたのは、四月十五日二十七歳だった。リヨン駅には日本水彩画研究所当時の恩師、永池秀太の出迎えがあった。六月ころであったか、青山氏は勧められて、巴里日本人会の書記を勤めることとなった(図一)。Porte Maillot(ポルト・マイ

llot)(23, rue Weber)の建物の二階に住み込みだった。当時はまだfortification「城壁」があったが、二三年に爆破されて、それがboulevard「大通り」になったのを記憶している。日本人会には読売新聞の松尾邦之助や椎名其二⁽¹⁾がいた。アナキスト松尾は、「だらしのない男」として青山氏の記憶に残る。椎名のファール『昆虫記』は大杉栄の遺志をついだもの。森有正が名訳との評価を与えていた。

大杉栄の監獄行き

一九二二年大杉栄がパリに来たときも青山氏は会った。林

俊衛^{しずえ}に会いに来て、留守だったので青山氏が対応した。国際指名手配同然の大杉は、マルセイユ上陸の際も逮捕寸前。変名を使っており、青山氏とのあいだには、

「お、お、俺が誰か分かるか。」「ああ、分かった。」「お、お、俺は阿部だ。」「そうか、阿部君か。」「そうだ。」などという珍問答があった、といふ。大杉が、メ

デーで演説をして逮捕され、ラサンテ監獄に入れられたので、青山氏は面会のため会いに行った。ほかにフランス語で監囚に対応できる日本人がいなかったためだといふ。Observatoire「気象台」の近く「実際には南に二キロほどの場所」だった。瀬戸内晴美の『美は乱闘にあり』には書いてないが、大杉がパリで獄中で書いた詩——愛娘、魔子への思いを綴る——を持ち出したの



図一 一九二二年頃、巴里日本人会にて左端下に藤田嗣治
[岡山県立美術館「一九二〇年代パリの日本人画家」展(一九九四より)]

は青山氏だといふ。周知のとおり、大杉は一九二三年、帰国してすぐ、関東大震災のにおりに殺された。あ

『画家の留学 青山義雄氏にうかがう1920年代フランス滞在の一齣』

『アート・フォーラム 21』第9巻、2004年冬、84-89頁

の震災のおりには、Quartier Latin「カルチエラタン」の rue du Sommerard「ソムナール街」の日本人会事務室「⁷」で対応した。電報も東京発ではなく福島経由だった。岩田某、獅子文六なども当時パリにいた。青山氏はその後十四年間パリに生活し、一九三五年に帰国する。戻ってみると、日本は陸海軍人がうるさく威張るようになって、嫌な世の中になっていた、という。

ふたりの関西人 小松清と小出楯重

以下しばらく、当方の質問に対する青山氏の談話をメモのまま抜き書きしてみよう。——「パリに来た同船には、安宅安五郎、相馬其一がいた。安宅は文展に出品していた立派な人だった「一九一九年、第一回帝展出品の『日蓮樹』で特選」。当時はちょうど日本人の画家がふえつつある時期だった。次に来たのが、坂本繁二郎、林倭衛、裕伊之助、小松清、ナガシマシユラ「十治郎」、みんな同じ船だった「九月のこと。クライスト丸の次の航海で渡欧」。裕は金持ちのボンボンで、奥さんのアデリアはニスにいるが、これはたまらない女だった。小出楯重も同じころに来て、林と一緒ドイツに行っている。林はインドにも半年。林倭衛の死に水は自分がとった「一九五〇」。豪傑だった。小出は、わしはもうパリはあかん。大阪人には住みづらい。金にうるさい「大阪人が？／＼パリ人が？」とこぼしていた。小出は話のおもしろい人だった。いっしょにやったスケッチが「青山氏の日本の」【自宅にあるはずだ。坂本は「方寸」時代から太田正雄（後出）とは知り合いだったらしい。「おお木下君」と日本人会で声をあげる。坂本はよい人だった。戦後に、青山氏の長崎での講習のさい、久留米に訪ねて会ったのが最後になった「一九五〇」。斎藤与里は文章が難解だった。裕の家で会ったことがある。青木も坂本も午

歳だ。裕はむづかしい男で、結局のちに別れた。佐伯祐三がパリに到着したのは一九二四年一月。佐伯にはよく会った。大阪の人。これは天才だった「——とは青山氏が来客にはもう何度となく繰り返してきた口調だった」。さらに同じ年に、高島達四郎、中村義夫、坂田一男が来た。カフェ・ド・リラ「今のロスタン」で木曜日に会った。藤田「嗣治」や川島理一郎、それに小柳正が藤田の妻・フェルナンドといっしょに来ていた。二百人は優にいた。長谷川「潔」は来なかった。鍋井克之もいた。鍋井と小出では比較にならなかった「小出が別格ということ」。正宗徳三郎はマティスに会っているが、正宗は言葉がでまず不器用で、青山が通訳だった。マティスには正宗の肖像があるはずだ。中川紀元のほうが先に着たはずだが、覚えていない……」⁵⁾

いささか蛇足を加えれば、数年前、小松清とヴェトナムとの関係を調査中だったカナダ・アルバータ大学のビン・シン教授から、友人が発掘したフランス内務省の秘密資料に、日本人の名前があるが、誰だかわかるか、とのお尋ねがあった。見ると、機密書類には、Kojima、Sakamoto、Hazana (sic) などの行状が報告されている。同船で渡欧した小松清がヴェトナムの愛国者にして革命家、ゲン・アイクオクと接触もついていたこともあって、小松とクラマールに同居していた坂本繁二郎、裕伊之助らの動向は、フランス官憲によつて密偵の対象となっていたわけだ(Kojima は児島虎次郎で当時帰国中)。また小出楯重はその随筆からも、頭の回転の早さと才気煥発ぶりが彷彿とするが、会話でもその才能を遺憾なく発揮していたらしい。この一九二一年秋のサロン・ドートゥヌには、藤田嗣治が審査員に推挙されているが、小出は中村義夫と連れ立って訪れたこ

の展覧会のことを「まづ今迄まで見たもの、中でこれ程イヤな情けないガラクタはめつたに、無い」ときき下ろし、三十分ほどで目眩がしたと漏らす「十一月十八日」。「先生に、ほめてもらつてトク意になって、まづい絵をかいて勉強と研究とを、怠らず励んである、憐れむべき日本の留学生」がずいぶん居る、と辛辣な観察をしてみせる小出は、いわゆる「パリ通の、キザな事つたらもうたまらないね」(十一月五日)と嫌悪を露わにする一方、パリの現実と日本とのあいだに「厚いガラスの壁」のあるのが「気にならない人間は幸せだよ」(十月七日)、と石濱純太郎宛に書いている⁵⁾。そこには井の中の蛙の虚勢などとは無縁な、醒めた理知が光っている。滞欧時代を頂点に凋落を遂げる油絵画家が多い。そのなかで、小出は正味五カ月と一週間の見物と買い物に資金を蕩尽し、小切手も事故で紛失したことを自慢話してみせた。そして、帰国後の小出は、なお一層自信をもって、粘着性ある油絵の具を駆使し、実質感の追求に、「集中安打」(鍋井克之)を量産するがごとく、打ちこんでゆけた希有な画家だった。

筆まめな

黒田重太郎と 国画創作協会の 欧州

一九二一年十一月十六日には、黒田重太郎、土田麦僊、小野国画創作協会の竹橋(のちに「竹喬」となる)、野長瀬晩花の一行がマルセイユに到着。途中の航海を含む紀行文は黒田の執筆になり、東京・大阪の時事新報紙上で二年一月一日より一年間にわたり連載され、挿絵も添えて後に『「歐洲藝術巡礼紀行」として刊行された(図2、3、4、5)。洋画家ですでに洋行の経験もあり、フランス語にも心得のある黒田重太郎が、記録係として抜擢されたものらしく、同じ京都出身の国画創作協会の面々の先導役を演じたいらしい。もつ



図2 小野竹橋(セリ又河岸)(オルピソンより)
〔欧洲藝術巡礼紀行(一九三三)十字館より〕

とも我の強い画家仲間の道中とあつて、騒動にも事欠かない。土田はといえば、辺り構わず賛嘆の声を上げ、絵画鑑賞に夢中になつて動かなくなつてしまふ、と黒田が悪態をつく一方、土田は土田で、絵の所在を確かめると、鑑賞の暇もなくさつと次の目的地を目指して歩き始めるせつかちな黒田を、家族への手紙でぼやいて見せている。

青山氏はこの黒田ご一行にも会つた様子。——〔黒田重太郎は、一度目の滞仏は戦争中で、アフリカ回りでパリに來たはずだ。京都でもパリでも会つた。日本では、日展や文展の審査員として。筆まめなひとだ。鍋井「克之」と黒田が二科会を代表して、俊敏で、お金をもらつて、展覧会に絵をいれるのいれぬの、と立ち回つていた。本当の「豪傑悪党」。本郷「新?」が児島善三郎とつかみあいの喧嘩をして、仲介に入つた辻善之助がケガをしたこともあつた。青木繁と坂本は午歳。黒田は安井「曾太郎」や梅原と同一年で、こちらより六つ

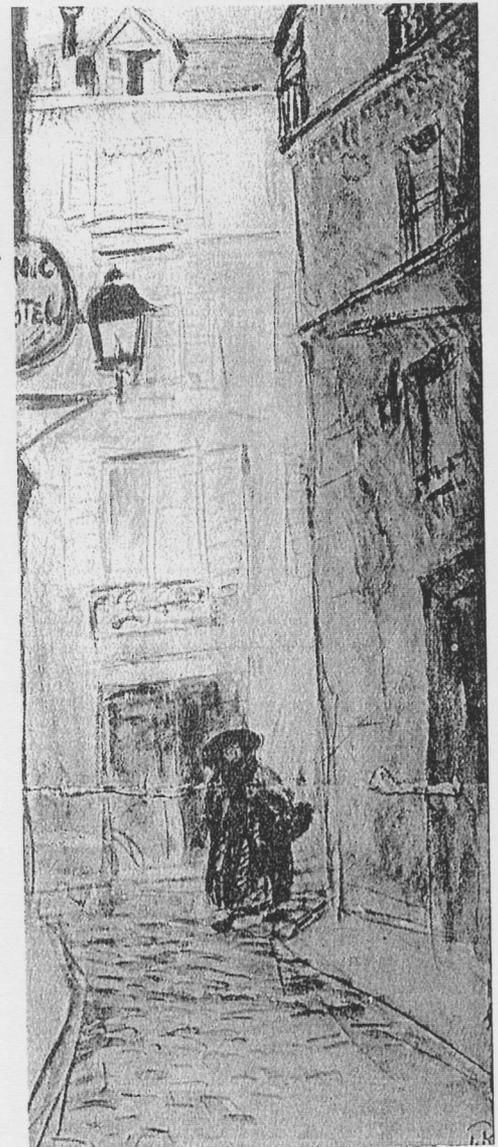


図3 黒田重太郎(ドミソの旧家)
〔欧洲藝術巡礼紀行(一九三三)十字館より〕

上だ……。』 美術史家たちの確執

さて一九二二年の秋には、東北大学で西洋美術史を講ずる児島喜久雄、またこれは米国経由で、医学博士、太田正雄こと、詩人・美術評論家の木下李太郎にも到着。ふたりは、サン・シュルピス広場のオテル・レカミエに泊まつたが、こゝは日本人客の常宿だらしく、この世話も青山氏が焼いた。おりからイタリア美術研究でベレンソンに師事した矢代幸雄も滞欧中。英文による名著『サンドロ・ボッティチエリ』三巻がメデイチ協会より刊行されるのは、震災後の一九二五年のこと。かれらはベルリンで会つてゐるが、その人間関係はどうだったのか。これら美術史家諸氏の人脈を青山氏に尋ねてみた。——〔太田クン「木下李太郎」と矢代幸雄はウマが会わなかつた。ボッティチエリ研究の矢代は努力家、秀才。一高時代から晩年まで、風貌が全然変わらなかつた。岸田國士にフランス語を習い始めたが、物覚えのよいの

に岸田が驚いたそう。銀時計の秀才だけのことはある。ダ・ヴィンチ研究の児島は、天才肌だがなまけもので、組織だつたことができない。一九五二年には亡くなつて、「青山氏は」フランスに滞在していたため、葬儀に立ち会えなかつた。坂崎坦とはほぼ同じころ、坂崎のほうが少しはやくパリに來た。これは好人物だつた。後年『週刊朝日』に挿絵をやらせてくれた……。』

青山氏は満十六歳で『方寸』(一九一〇年刊行)に木下李太郎の文章を見たという。荻原守衛や青木繁の追悼文があつた。太田からは石川啄木の話を聞いた。白秋の『邪宗門』の挿絵は李太郎。啄木を病院に入れるのに太田が世話を焼いたという。啄木は「うそつきで困る」といつていた。武者小路とのけんかの話も聞いた。山脇信徳の『停車場にて』の評価をめぐるいわゆる「絵画の約束」論争のことだろう。李太郎は、はにかみのある、腰の低い、いい人だつた。木の下で本を読んでいて試験をすつぽかして落第し、森林太郎にあやかつて木下

李太郎と筆名を名乗った話も出た。一九三五年、青山氏が一時帰国の際に、太田の仙台時代に児島と三人で会った。小宮豊隆も呼ぼうとなったが、大雪のため遠慮した、という。⁽⁸⁾ ついでながら、斎藤茂吉、小宮豊隆、阿部能成らがあいついでパリを訪れたのは一九二五年。留守中に斎藤茂吉が小宮を訪ねてきて、伝言が残っていたのを覚えていた。斎藤茂吉は戦後国画会の展覧を見に来てくれて、「まあ青山サン、スバラクブリデスタナー」とのご挨拶があったそう。青山氏による大杉栄、小出柵重や斎藤茂吉らの声帯模写は、どうやら十八番だった様子で、来客にはしばしば披露したのでらう。照子夫人「斎藤茂吉の妻」とパリで出会ったこともある。森鷗外の遺児たちのお世話もして、ひとりひとりの人物評もうかがったが、今はこれを略す。そういえば、スーパバーバチャンを自称していた斎藤照子さんも先日亡くなったと聞いた。ゴビ砂漠の旅行中に病気で倒れて……と、青山氏の話題は最近

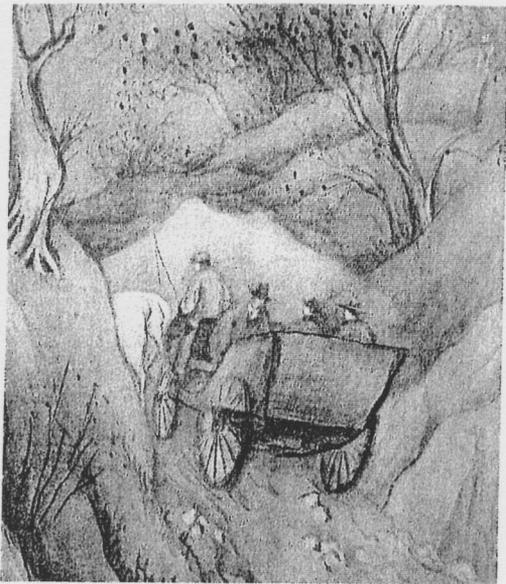


図4 小野竹橋(ルナールの居を訪ふ道)
〔欧洲藝術巡礼紀行(一九三三)十字館より〕

の計報に及んだ。

どもりの社交家 石井柏亭

石井柏亭は一九二三年末に米國經由で二度目の滞欧を果たす。「滞欧州記 芸術と自然」(一九二五)からもその精力的な活動ぶりと、繁忙な日程が知られる。翌年の二三年にはサロン・ドートンヌに二科会による日本部が設置されるが、その準備交渉も石井が全権を委任されていた。パリで個展開催にも漕ぎ着けるが、レオン・ス・ベネディット(J. Beneditte)に執筆を依頼した展覧会序文が、ほとんどそのままベネジット(Benezi)の『画家名事典』の石井の項目の記載になっているあたりにも、石井のちゃっかりした処世術が窺われる。以下、青山氏の石井評。——「石井柏亭は絵はおもしろくないが、話はおもしろい。たいへんな常識家だ。ひどいどもりのくせに社交家で、平気でしゃべり、どんどんパリでも人脈を作っていた。通訳に頼らず、なんでも自分でやる人で立派だが、常識で絵を描くから、困る。記

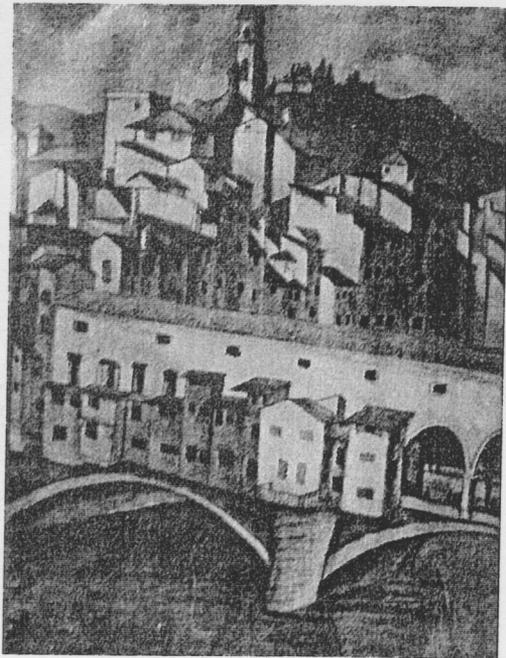


図5 小野竹橋(ライレンツェのポチヴェウキオ)
〔欧洲藝術巡礼紀行(一九三三)十字館より〕

憶力はよい人だった。弟の鶴三は兄が大嫌い、日本に帰って会ってみたら、エラクきむづかかった。朝日「新聞」の小川正隆とこのあいだ話をしていたら、なんでも鶴三に柏亭の思い出を話させたら、コキオロシがあまりにひどいので、そこまで酷評するか、と驚いて見せると、「いや、これで十分に手をくわえてあります」とのお応え。梅原龍三郎は「鶴三はたいしたものだ、あれぐらいハッキリしているとモノゴトが簡単だ」といつていた。戦後、鶴三の家にドロボウが入ったことがあるが、彼は黙って見ていた、という。泥棒のほうがあわてて、草履を忘れて逃げて行ったそう。⁽⁹⁾

版画家たち

山本鼎は版画雑誌『方寸』に先鞭をつけ、木下李太郎とも交友があり、後には農民芸術運動でも知られる。渡欧は一九二二年で、一六年末にロシア經由で帰国。したがって青山氏は、山本鼎にフランスでは会っていない。⁽⁹⁾ 山本を巡る思い出は、以下いささか画壇ゴシップに脱線

する。——(山本鼎は、島崎藤村と交友があったが、彼には春陽会を抜けて「一九三五年脱退」日展審査員のところに会った。春陽会(一九二二年結成)は伏魔殿山本は苦勞人で陰でくづく。辻永が「悪者」で実権を握っていた。「光風会の出店ではない」と青山氏がガミガミ文句を言った。晩年、山本鼎はこれを回想して「青山は好きだねえ」と漏らした)由。

宇野浩二や鍋井克之と交友のあった永瀬義郎は、一九一八年、山本鼎の日本創作版画協会に合流するが、そのバリ遊学は、ややおくられて一九二九年。三十八歳の時。青山氏の記憶によれば、永瀬は、気の若い、いいいちゃんだった。早川雪州主演の映画『ラ・パタイユ』(一九三四)に出演したのが自慢である。原作はクロード・ファレル、監督は日本通を自称するが、実はまったく無知なラルカッシュ。主演は、シャルル・ボワイエ、アナベルほか。撮影のときに日本人エキストラを集めたのは、ほかならぬ青山氏だった、とのこと。永瀬は東郷役のはずだが、フィルムの画面には現れず。永瀬自身は、戦艦「三笠」の鑑橋に立つだけの役で、台詞はなかったと証言している。真偽やいかに。永瀬には、その晩年の著書『放浪貴族』そのままに、無一文で放浪する楽天性があつて、いつもニコニコしていた、という。

永瀬の友人の長谷川潔はすでに「フランス人、ミシユリーヌと」結婚していて、大金持ち。こちらは神経質で日本人たちを警戒していて「teigne」な態度。猜疑心が強かった。戦後手紙を出したが、住所が違っていて戻ってきた。仏日の財産往還や新田の導入などで、その財産も紙くずとなり、戦後苦勞していた。中川一政がフランスに来たとき、ルドンの画集を長谷川から渡してもらったが、代金を払ったか否かでもめ、青山氏が

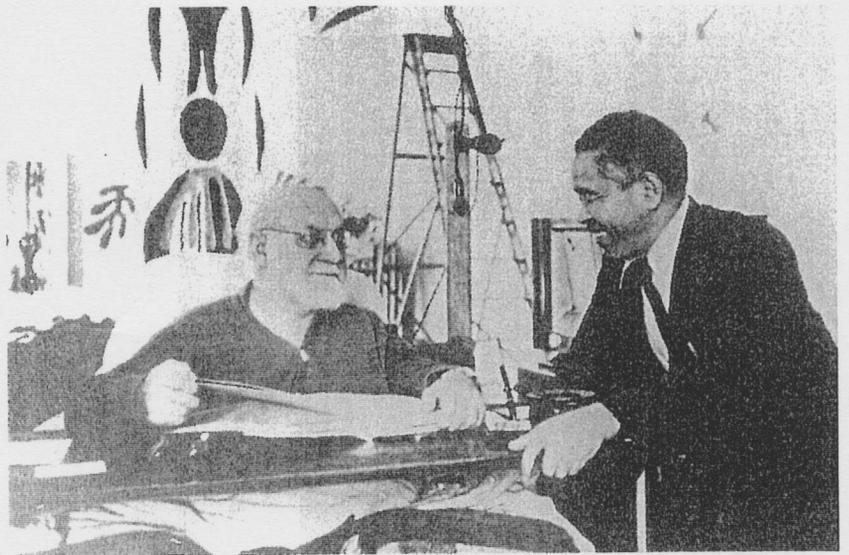


図6 マティスを訪れた青山義雄(一九五三)
〔神奈川県近代美術館「青山義雄展」(一九八八)より〕

立て替えたことがあつた。中川は金にしつこいが、正直者だ。死ぬ前に萩原大使と長谷川「潔」と三人で食事をして、家までタクシーで送ったことがある。「脈絡や不明だが」このあたりのこと、佐藤敬は無責任にしゃべるので困る、とのこと。

藤田嗣治のことなど

あとは後日談。青山氏の回想を、当日の記録ノートからそのまま採録しておきたい。

レオナルド・ラジタは、おちよこちよいでご都合主

義者だった。詔^{ひさ}っているのが見て取れた。だが一九二二—二三年ころの五〇号の静物「画」や室内「画」は日本にも送っているが、これは傑作だ。後年のハダカよりも小品のほうが良い。楽しんで描いている。後年は有名病に取り付かれた。ガシエの息子の「ファン・ゴッホを見取ったガシエ医師の息子」は日本人を優遇した。「財閥二世」安田「善二郎」などもよく遊びにいった。詰め襟の洋服だった。「ガシエの息子は」作品の写真も撮らせずケチとの陰口もあつたが、今では印象派美術館に入っている作品をルーヴルに寄贈している。

青山氏は一九二五年に日本人会をやめた。その旨を記した手紙を木下幸太郎あてに書いている(岩波版『幸太郎宛書簡集』四二九)。——(病氣「妻かね」ともども肺結核による咯血でカーニエに療養していたときにマティスに「発見」され、三十点の作品が三〇〇〇フランで買われ、これが「一九二八年」ベルリンで個展「フンベルト画廊」に展示された。マティスには二六年にカーニエに会いと言われ、その後マティスから福島繁太郎に紹介された。カーニエには長興善郎も来た。戦後になって日本の景気が回復してから、フジカワ画廊が「ベルリンで展覧した作品を」買い、新旧作あわせて展示された。土方定一は、昔の絵の方が「今の絵よりよい」といつて十二点を鎌倉の近代美術館に購入してくれた。ただし、金がないので支払いは年賦にしてくれ、と言われた。彼と会ったのは二度だけだ。』

『マティスには「君には色彩がある、君の色彩を大切にしろ」と言われた。マティスから習ったのは、フラランジェリコの「colori」(「色価」と興行きを学べ、との教え。あとは「物体の」後ろに「まるる絵を描け」といわれた。マティスはルノワールをたくさん買っていた。一九五三

年講和条約の締結以前に、マティスから招待してもらったかたちで「SAS」でイタリア経由でフランスに戻った「アトリエ」には一九五三年に一緒に撮った写真(図6)が、マントルピースのうえに飾ってあった。その後二度日本には戻った。そういえば一九二一年のカーニョのルノワールのところの仮装舞踏会に行った。マティスはエジプトの王様の役。ジャン・ルノワールは派手好きだった。川島「理一郎」や梅原「龍三郎」もマティスに会っているが、そのあたりはよく覚えていない。カーニョにはモジリアニ、スーティン「もう一名の名前、メモできず」の三人も来て、フジタの話も出た。モリス・ドニといえ、パリに「一九二一年」ついた翌々日にアカデミー・ラソンンに行った。ドニに絵を見てもらったこともある。セーヌ街を歩いているのを見たこともある。シャンゼリゼ劇場の天上画が当時は有名だった。一九五四年にはマティスが心臓麻痺でなくなった。葬儀にジャン・コクトーが来たのをお世話した記憶がある……(以下略す)。

〔付記〕以上は、筆者が、一九八五年四月六日、ニースの海を見下ろす高台にあった、青山氏の自宅兼アトリエにとうかがった話を文章に起こしたものである。当日の会話は、テープ録音はしておらず、当日のメモから、あらためて復元した。青山氏は当時九十一歳。毎週のように日本からの来客が訪れる繁忙のさなか、日本向けの油彩の制作に勤しんでおられた。たいへんな未来志向で、明日は何をする、今年の夏にはどこに行く、といった今後の話題に夢中になっておられ、過去を振り返ることには、さして執着されなかった。だがこの前後から青山氏に戦前のフランス滞在の様子をうかがおうとする記者や研究者の来客も、頻繁となりつつある様子だ

った。質問に答える青山氏の回想の口調には、抜群の記憶力とともに、いくつか定型の受け答えもあったように思われる。そうした青山氏の回想を基にしてまとめられた記録のうち、もともと整理の行き届いたかたちで公刊されたのは、『青山義雄』展(一九八八)のために調査された、橋秀文氏のもの(同展年譜)だろう。それに数年先立つ当方の筆録は、足掛け二日の滞在のなかで綴った備忘録に過ぎず、もとより遺漏も多い。当時の当方の知識不足ゆえ、当然うかがうべき質問で、取りこぼしたのも少なくない。ただ、かつての友人たちの品定めなどには、歯に衣を着せぬ寸評にも、旧友たちへの愛情があふれていた。そこには生き証人ならではの卓抜な性格描写や、見事な声帯模写もあって捨て難く、ここに復元する次第である。

これら回想の内容には、時に辛辣な評言もみられ、あるいは橋氏など、公表のために配慮して割愛された箇所もあったかもしれない。言及された特定の個人やその遺族にとつて、同意し難い判断も含まれていないとは言えまい。だが青山氏生誕から来年ですでに百年を迎える今、むしろそうした現場での評価の彩も、恩讐の彼方に過ぎ去って、すべては貴重な同時代の証言へと昇華されるべき時機ではないか、と思う。生前の青山氏からは、本インタビューの内容公表の許可を得ていたが、機会を見ぬまま、今日を迎えてしまった。事実関係の不明に関しては、あくまで発表者に責任の帰することをここに確認し、関係各位のご理解に感謝したい。なお、当日のメモは、二〇〇二年七月二十七日に再発見し、整理したもの。遺漏、誤謬などあれば、識者のご指摘に俟たい。

注

- (1) 藤川譲「パリに死す——評伝・推名其二(藤原書店、一九九六年)。また松尾邦之助「フランス放浪記」鱗書房、一九四七年には「巴里日本人会の書記」A」に関する悪口が見える(一七頁)。
- (2) 「阿部」という偽名を使っていた大杉と青山とのこのときのトナンカンな会話は、橋秀文氏による年譜にも採録。神奈川県近代美術館「青山義雄展」図録、一九八八年参照。
- (3) 以下は、一九八五年四月六日、ニースの青山義雄氏の自宅兼アトリエにて採録。
- (4) 「ピンシン」小松清「ベトナム独立への見果てぬ夢」、高杉忠明・松井敬訳「世界」二〇〇〇年四月号・二七五—二八五頁、五月号・二六四—二八二頁。ほかに林俊「クロード・ロダン」ビューストの肖像。小松清「白亜書房、一九九九年。また社会的背景としては、渡辺一民「フランスの誘惑」近代日本精神史論「岩波書店、一九九五年。有効な補助線としては、読み物として楽しめる、出口裕弘「辰野隆」日仏の円形劇場「新潮社、一九九九年など。
- (5) 「匠秀夫」編「小出楯重の手紙」形文社、一九九四年、に滞欧期の手紙復刻あり。
- (6) 「欧洲藝術巡礼紀行」。紀行文は黒田筆、挿絵は黒田重太郎・土田麦徳・小野竹橋・野長瀬晩花、大阪時事新報社、一九二三年。「森仁史氏より購入。草薙奈津子氏に謝意を表す」。
- (7) 田中日佐夫(編)「土田麦徳のヨーロッパからの書簡」(正統)、『美術美術史論集』成城大学大学院文学研究科、一九八七年七月、八八年十一月。またアンリ・エトとの恋に關しては、柏木加代子「かきばた」土田麦徳の愛と芸術「大阪大学出版会、二〇〇三年。
- (8) 青山義雄「古い手紙」図書「岩波書店、一九八四年十一月」のあたりに關する回想あり。「木下李太郎宛書簡集」岩波書店、書簡番号三七一、に青山氏よりの問題の書簡がみえる。一九二三年のサロン・ドートンヌ入選作の件に言及あり。
- (9) 記録としては、山本照「プルトーニ日記」、小崎軍司(編)「信濃路、一九七八年が残る。また、藤沢道郎「高崎藤村のフランス行き」比較文学研究叢書、高崎藤村「朝日出版社、一九七八年、および今橋映子「異都憧憬」日本人の「パリ」柏書房、一九九三年。
- (10) 永瀬義郎「放浪貴族」国際PHD研究所、一九七七年にも本件への言及あり。
- (11) 猿渡紀代子「長谷川潔の世界」有隣堂、上中・下、一九九七年。一九九八年参照。
- (12) 「La peinture cest ga l'oune.」は、物体の立体感の再現を重視するアカデミーのデッサン教室での基本的な教え。立体表現に不得意な東洋画家への定番の指南だろうか。

* なお関連の展覧会目録は無数といつてよいが、とくに東京国立近代美術館「近代日本美術史におけるパリと日本」一九七五年、岡山県立美術館「一九二〇年代 パリの日本人画家」一九九四年をあけておく。